

別冊 センターつうしん
NO.80

こども 教育 文化

第13号

もくじ

みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい2015
「国語分化会」の報告
「生活・総合分化会」に参加して
「国語分化会」に参加して
こども・こころ・ひょうげん
民教研とわたし
体育同志会との出会いから
宮城の教育遺産¹³
第1回「東北民教研」仙台集会の記

鈴木 隆：1
白鳥 利彦：4
佐藤 弘文：7
小澤 登：9
鎌田 克信：14
宮崎 典男：16

みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい2015

「国語分科会」の報告

鈴木 隆

今年の集会の意義

「教育のつどい」（以前は全国教研と呼ばれていた）に、私は過去2回参加したことがある。高知（昭和54）と長野（平成15）である。高知では帰りに桂浜に行き坂本龍馬像をみてきた。あの腕組みをして太平洋をみつめる龍馬の姿は、これから国語教師として生きていこうと考えていた私の心象風景となり、その後の教員生活の中で何度も思い出すことになった。私は昨年60歳を迎えたが、まさか今年宮城で教育のつどいが開催され、しかもこの記念すべき集会上レポーターとして参加することになるとは思いもしなかった。まことに人生の巡り合わせというのは不思議なものだ。

初日の全体集会で、いくつか話されたが、とくに次の2点が記憶に残った。①被災地宮城で開催されること。東日本大震災と福島原発事故から四年半を迎えようとしている今、被災地の現状を見つめると共に、そこから求められる教育課題と向き合った教育実践を学び合い確認し合う場だということ。②安倍内閣の「戦争法案」の審議が進む中、憲法と子どもの権利条約をどう守り活かしていくのか。また18歳選挙権が来年の参議院選挙から施行され、今の高校2年生も投票権を行使すること

になる状況の下で、子ども達がよりよい社会を主体的に作り上げていく主人公として成長することをどう保障していくのかについてしっかりと議論する場だということ。

私のレポートについて

標題は「国語通信について」。これまでに発行した国語通信を抜粋して紹介したもので、何か新しい教材を発掘したとか、伝統的な教材をこれまとは異なったやり方で授業したというものではない。ただ国語では生徒に書かせた感想や小作品は生徒に返していくことが、教科の特性上他の教科よりも多く求められるわけだが、最近職場が多忙化しているためか、それがあまりなされていないという話をよく耳にする。そこで警鐘を鳴らす意味で、レポートをまとめてみたのである。

国語通信は、①基本的には生徒の感想を多数載せる。生徒達がそれを読むことで教材の理解が深まり、書く意欲が高まり、授業への集中が増すのである。次に、②教師の文章を載せる。教師が教材をどのように読んだのかを紹介したり、作家の生き方の面白いところを伝えたり、教師の現代社会論、青春論や人生論、好きな詩や歌などにまつわるエッセイを載せる。国語はあらゆる教科の中で社会科学とともに、世界や人間・人生についてもっとも生徒に迫ることが求められる教科であり、その仕事の一端をこの通信に担ってもらおうのである。通信を月に3枚から4枚発行し続けるに

だけでは、生徒の理解もうわべだけにとどまることが多い。それを「小学6年生にわかりやすく説明する」という条件をつけたことで、生徒は「子どもの権利条約」に本気で向き合い、条文をわかりやすく翻訳する作業と条文が実際の生活ではどのように具体化されるのかを一生懸命考えることになった。つまり、主体的に条文と向き合い、その深い内容を自分たちの手でつかむことができたのである。二つ目に小学生に伝えるためにたんに文章を読み上げるだけでなく、クイズ方式やパワーポイント、寸劇風、カルタを用いるなど小学生が興味をもちそうないろいろな方法を案出していることである。

★ 国語表現の授業はともすれば、作文や小論文の指導と就職試験対策の時間に終始しがちだが、この実践は生徒の主体的参加を実現させながら、文章表現力とプレゼンテーション能力を高めることをめざしたすぐれた実践といえる。

その2 「原子の火ともる」の授業

京都・私立東山高校 九野里 信夫先生

① 「原子の火ともる」

(1957 読売新聞の記事) の読解

今から60年前に書かれた原子力発電のメリット・すばらしさを具体例を挙げて説明した論説文をよませる。福島原発事故のことを知っている生

徒達はその論理が完全に破綻していることを見抜いており、読解の授業後、この文章に対して意見を書かせた。

② 「フィアンセ」(原発ジプシー) 原発作業員

の状況を描いたノンフィクション) 結婚を間近にひかえた原発作業員の若者(福島・敦賀・浜岡で働いてきた)が自分が被曝していて、それが自分の子どもに影響が出るのではとひどく心配している様子が描かれた文章で「文学」のジャンルに入れてよい文章。主人公の心境を丁寧に読み取っていく授業を通じて、生徒は原発作業員の置かれている厳しい現実とその苦悩に共感的理解を示す者が多かつたという。

★ この実践に対しては、生徒を「原発反対」の考えに誘導するものではなく、という意見が出されたが、「原発のすばらしさを述べた文章を、筆者の論理を理解しながら読ませた結果として筆者の主張には賛成できないという考へるに至ったのであり、そうはいえない」という反論があった。二つの教材をきちんと読んでいくならば、ごまかしなしに「原発のもつ根本的な問題点」にいきついでしまう。福島原発事故を体験した世代としては当然の結果だ。その点で得難い文章を発見し教材化したものとして高い評価を得た。

その3 「震災体験の作文指導」

元・宮城県石巻市立雄勝小学校 徳水 博志先生

被災した子どもに寄り添って心の不安や叫びを聞き取り、受け止め、希望へとつなぐために、国語の授業でできることとして「自分の震災体験を対象化する実践」に取り組んだ。震災から2年が過ぎたが、すぐに作文に入るのはむずかしかったので、震災体験を俳句にすることから入った。その後、作文を書かせる指導に入り、初めて一人ひとりの衝撃的な震災体験がみえてきた。これを読んだら読んでもらい、我が子への手紙を書いてもらったという。この授業を通じて、子どもたちは大震災による喪失感と先行き不安の心理に折り合いをつけ、「希望の船」と題する木版画の共同制作に取り組むに至った。

★ 京都から参加した若い教師は「この報告を聴いただけでも宮城にきた甲斐があった」と話していたが、すばらしい実践だった。震災体験をただの苦労話やマイナス体験に終わらせるのではなく、子ども自身にとってどのような意味を持っているのか、「震災が自分から奪ったもの」と「奪えなかったもの」を対比させてとらえる方法を示し、震災を子どもたちにより深く「対象化」させて、立ち直りの契機としている。大震災では、当時私も石巻の高校に勤務しており、クラスの生徒たちも家族を失ったり、津波で家が流されたりし

ていた。しかし、私の場合震災体験を作文に書かせることはできなかった。「あのことはもう思い出したくない」という生徒がいる中で、こちらから一斉に書かせるわけにはいかなかった。(翌年の3月になり、生徒会長が卒業式の答辞の中で、その大半を費やして自らの震災体験を読み上げたが、その時には会場全体が涙に包まれた。大震災と冷静に向き合うためには高校生でも1年という時間が必要だったように思う)

「生活・総合分科会」

徳水先生は、「書くことが、不安定な心を整理し、落ち着きを取り戻し、理性の力を取り戻し、人を希望につないでくれる」ことを確信している。パニックに陥りかねない子どもへの細やかな配慮を忘れずに、俳句から作文へと段階を追って取り組まれた。それが今回の実践だったのではないか。先生は今、地域の復興のために学校教育は何をすべきなのかを自分のテーマとして活動されているという。今後の実践が楽しみだ。

(田尻さくら高校)

に参加して

白鳥利彦

1 心を揺さぶられる思い
興味津々で、レポーターの報告に耳を傾けていた。

一つ目。「学校づくりをしていたら憲法が見えてきたー楽しくなければ学校じゃないー」、これは、通信生単位制高等学校における豊かな学校づくり、授業づくりをめざした実践である。いろいろな年齢の複雑な環境を抱えている生徒たちが

通ってくる学校だった。開校以来13年かけて、教職員同士がしたいにつながりを深め、目の前にいる子どもたちに「学校に来る日を楽しみに思える」時間と空間を提供するために奮闘してきたことが伝わってきた。教職員も生徒もいっしょになって、自分も周りの人もみんなが幸せに生きていくためには何が大切であり、どうすればいいのかを考え一つずつ形にしていく中で、一人一人の立場や条件は違っても、互いの人権を尊重する心地よさに

気づき、日本国憲法の問題に行き着いた取り組みだった。単位制という特徴から毎日、毎時間生徒と顔を合わせるわけではない。加えて目的意識も違えば、学校に対する負の経験も抱えている。極めて限られた条件の中で、言葉には表せない苦労もあつたであろうことは容易に想像がついた。「憲法どおりの学校をつくらう」としていたわけではない。どうあればよいかを考えていったら、憲法といっしょだと気付いた」という言葉が心に響いた。

二つ目。「教育困難校での総合(音楽)の実践」ひとり一人が主役・『私にもできた!』、これは、職員会議無し、委員会活動皆無、平日の部活動正味30分という生徒の自主的な活動が極端に制限された高等学校での実践である。いろいろな事情で傷つき自信を失いつつある生徒の心に寄り添い、音楽という授業をとおして前向きに生きる柔軟な心を育てていくきっかけをつくらうとした取り組みだった。入学した生徒がまず取り組むことになるのが校歌。過去に不登校であったり、歌うことに抵抗を感じていたりする生徒もいて、週1回の授業時間では、なかなか指導しきれない状況にあつた。それでも、生徒の底力でも言うべき可能性をひたすら信じ、何らかのきっかけを得て、きつと乗り越えてくれると確信しながら指導を続けたということだった。生徒と共に悩み、解決の糸口を必死に模索している姿が目に見えんできた。

三つ目。「沖縄を学ぶことで子ども達がつかん

だことく和光小学校の平和教育の到達と課題」
これは、戦後ユネスコの実験校として出発しコア
カリキュラム連盟の中心校としてカリキュラムの
自主編成を大切にしてきた小学校の実践である。
「米軍基地についてどう思いますか？」という問
いを沖縄のアメラジアンスクールの中学3年生に
質問していた。回答の中には、「私はあってもな
くても別にいいと思う」「窓を空けて」とつとと
帰れ帰れ」と言われる。「私たちは戦争から生ま
れてきた」という内容があった。和光小学校の子
どもたちは事前学習とのギャップ（基地によつ
て県民が嫌な思いをしている「等々」に驚いたと
いう。それでも、この経験は子どもたちの中に平
和とは何か、基地とは何かという根源的な視点を
与える結果となり、新たな学びに発展していった。
紹介された子どもの感想を聞き、私も考えさせら
れた。「次の世代を生きる私たちが過去に起きた
戦争のことを忘れないで、しっかりと学び考える
ことが大切だと思います。……今やるべきことは
伝えるということ。……戦争のつらさや恐ろしさ
を伝え、命という宝を守り平和な世界を作ってい
くことが大切な課題」

ここまでの発表を聞いたとき、確信した。実践
の動機が並々ならない必然にあることを。それぞ
れにアプローチは違っても、一つの目的に向かっ
ていた。それは、子どもたちに自主的、自立的な
思考力、判断力を養うこと。

もちろん、実践者自身に興味関心がなければ続

かないだろうが、今日の学校現場の多忙な状況を
考えれば、個人的な思いだけでは到底やり切れな
いことは容易に推察できる。

主権者意識の育成という揺るぎない教育理念が
活動を貫いていた。誰にでもできることではない
と素直に思った。

また、学習活動を可能にする、地域環境、資料（知
識）、人材（協力者、経費、保護者の理解、年間
計画等々の諸条件を自ら構築していく実践報告に
驚愕した。特に、「3年生・お蚕さまに学ぶ」報
告には、蚕の餌となる桑の葉を確保するために、
東奔西走する姿が見て取れた。同僚に聞いても足
りない、保護者からの情報を得て早速行ってみる
と近くの畑の影響から農薬の心配があることを知
らされがっかり、学校の警備員さんから新たな情
報が入り、やっと確保することができている。日
頃からいろいろな人とのネットワークを張り巡ら
せていること、お互いに快く関われる協力関係を
築いていることの大切さを再認識した。これらは
一朝一夕には難しい。意欲や必要を形にするには、
それなりの対価（労を惜しまないこと）が求めら
れること、求めれば形になる喜び（成果）が得ら
れることを思い知らされた。

2 自分のこれまでの経験から

生活科であれ、総合的な学習の時間であれ、す
でに作成されている年間指導計画を踏襲する活動
がほとんどだった。自分なりの思いや目的意識が



希薄なまま、発表会というゴールに向かって、言い換えれば、評価のために活動をしていた。

それでも、実践報告を聞いていて、一つだけ、これまでの自分の経験の中からよみがえってきた活動がある。地域の大人たちの思いを知り、地域の一員としての自分のかかわり方を考えようという課題を設定した総合的な学習の時間だ。

指導計画上、地域の伝統文化を体験するという内容だったが、学習対象としていた地域の団体が活動を休止してしまったことにより、新たに学習課題を発掘する必要に迫られた。

伝統文化が地域の中にも存在することは稀である。思案したあげく、地域が総力を挙げて取り組んでいる「夏祭り」をテーマに設定することにした。小さな集落ではあるが、老若男女、何らかの役割を分担して盛大に開催している経緯があり、当然子どもたちも多くが参加経験をもっていた。

夏祭りの実行委員の方を招いて話を聞いたり、記録写真を見たり、自分の家族に取り取りしたりしながら、子どもたちは、地域の大人たちが夏祭りに寄せる思い（親睦、活性化、郷土愛を感じ取っていた）。ミニ実行委員会を結成して、模擬店を出店し、大人たちを招いて楽しんでもらった。

主催者としての自覚を醸成できたかどうかは図れないが、今も地域に積極的にかかわっていることと意識をもち続けていることを願っている。

3 生活科、総合教育は何のために

直接触れる活動をとおして、一つ一つの事象の成り立ちを学びながら、形には表れないそれらの関連（理由・目的・要因・願望）を学ぶことなのかもしれない。これからも、子どもたちの生活経験や地域の環境の変化に対応しながら、子どもたちに地域の継承者としての自覚を培うことに主眼を置いて取り組んでいこうと思う。この過程が、主体的な追求の姿勢を育み、いずれは主催者意識の目覚めにつながると信じながら。

子どもたちの身の回りには無数に学習課題が眠っている。掘り起こすには相応の労力が必要とする。「見方・考え方・判断力」を研ぎ澄まして、揺るぎない「信念」をもち続けたい。

4 課題解決は人間関係構築の過程

一人ひとりの課題追求では、早い段階で限界が訪れる。いかに発想が豊かでも、決められた時間の中では、できることが限られてしまう。必然的にチームワークが求められる。

方向性を指し示す役割、情報を集め処理する役割、伝達する形に仕上げる役割等々互いの協力関係が生まれる。課題に応じて、得手不得手を生かしてその役割を交代しながら。

最初は混沌としながらも、「これやってみたい」という興味が引き金になって組織化されていく経験を何度もしてきた。

自覚的に行動する子ども、指示に従う子ども、傍観する子どもたちが課題解決という糸で結ばれていく様子はとても興味深い。

5 生活科、総合学習を成立させるためには

今回、指導者の目的意識が重要なることを改めて実感した。レポートからは、できるかどうかではなく、どうやったらできるかという気持ちがありありと見て取れた。

やっていて楽しい学習対象であることも不可欠だと知らされた。つらいこともあるけど続けたいと感ぜられることが追求の原動力になることを。



そういう課題は、「誰かに話したくなる」ものだという報告があった。思わずうなずいた。発表会などと銘打たなくても、子どもたちは知らせる活動を求め、自ら場面設定していくということだった。発表のために取り組んでいた自分の姿が浮かんだ。

6 先にあるものは何か

自分の疑問から出発し、解決の過程でいろいろ

な見方、考え方を知り、自分の中に新たな価値観が生まれることを自覚する楽しさは、学ぶ楽しさそのものだと思う。

一つ一つの知識や事実の関わりから自分なりの結論を導く過程は、思考力を高めることにつながる。このような活動を楽しいと感じたとき、もつと学びたくなるのだろう。知識、学びへの欲求が高まれば、他の教科や活動への波及も期待できる。

(宮教組執行委員)

「国語分科会」に参加して

佐藤弘文

私は国語分会にスタッフとして参加した。

初日の全体会では、北海道の高校の先生が小高連携授業の実践発表を行った。内容は高校の国語表現Ⅱ・わかりやすい表現単元で、子どもの権利条約の条文を小学生にもわかる表現に言い換えるというものであった。小中連携というものはよく耳にするが、小高連携というは初めて耳にして驚いたが、話を聞いていくうちにその面白さに引きつけられた。「子どもの権利条約」について何となく分かっていたつもりだったが、その内容につ

いても少し考えさせられた。

こうして始まった分科会。何となく楽しそうだな、自分の学びにつながっていくのではないかな、参加して良かったなと思えた。

初日の午後からは、小学校分科会と中高分科会に分かれて行われた。私は小学校分科会に参加した。この日は「作文」についての様々な実践が発表された。京都からは1・2年生で作文を書き、読み合う実践の発表。作文を書き、それを読み合うことで一人ひとりが成長していく。保護者の理

解も深まっていく。そんな発表だった。作文を読み合うことで、作文での表現が豊かになり、子どもたちの人間関係も深まり、子どもたちが成長していくという実践を聞き、私もぜひやってみたいと感じた。

青森からは宿題として書かせた日記の中から1作品を選び、1ヶ月に1回学級文集を出している実践だった。ここでもやはり、作文を書かせるだけではなく、それを読み合うことの大切さを感じた。また、作文では「はじめ」「なか」「おわり」に気を付けて書くという実践もあった。書かせる上で、「はじめ」「なか」「おわり」というのは子どもに書き方のお手本として必要な知識の一つなのかもしれないが、それがかえって子どもたちに書きにくさを感じさせているかもしれないという話も出た。

その他にも詩を書かせたり、学級通信に書かせたものを載せたりと様々な方法で書くことの楽しさを感じさせたり、豊かに書く力を伸ばしたりと試行錯誤をしている全国の先生方の実践が発表された。どの先生も子どもたち書かせるだけではなく、それを読み合ったり、共感し合ったりすることが大切だと考えていると感じた。

2日目は文学作品の読み方指導を中心に実践報告がされた。報告の中では、どの先生も教材解釈に力を入れるということが共通していた。教師が一字一句ていねいに読むことで教師の教材に対する解釈ができあがり、そこから児童にどんなこ

とを考えさせたいかという思いを持つことができ
る。教材研究というと先輩方の実践やその指導案
を参考にして考えていくことになりがちだった
が、それではどうしても自分の授業にはならない。
自分で解釈して、自分の思いをもってこそ、子ど
もたちと考え合える授業ができるのだと改めて感
じることができた。「こんぎつね」の実践を報告
された東京の先生は実際にごんの舞台とされる愛
知県半田市まで実際に行き、教材解釈を深めて
いた。

今回、教育のつどいに参加して思ったことは、
全国の先生方も同じようにどう授業すべきか悩ん
でいるということである。自分だけでなく、全国
の先輩方も同じように悩んでいるということが分
かり、少しほっとしたというのが本音である。一
方、その中でも、何か自分の思いを持って、日々
の授業の中に工夫や取り組みを行っているという
ことに刺激を受けた。指導計画に沿った日々の授
業、学校行事、事務作業に追われ、何か一つでも
自分の思いを持って取り組むことができていない
自分に気付いた。今回参加された先生方のように
常に教育とは何かを考えながら日々子どもたちと
関わっていくとともに、私自身がやってみたくも
のに何か一つでも取り組んでみたいと思っただ。

(仙台・鶴巻小)

宮城・現地実行委員長あいさつ

「被災地」で開催される教育のつどいの意義

片山 知史（東北大学教授）

「復興災害」という言葉を「存知でしようか。大規模な災害から、数年から数十年を要する復興の過程で、心身の病を患ったり、家庭が崩壊したり、町が衰退したりすることです。」

全国に流れる被災地のニュースでは、建物の完成や前向きなとりくみが紹介されています。しかし、被災した多くの沿岸地域では、盛んに工事がおこなわれていますが、人々が生活している姿が全く見えません。生活基盤は未だ全く整備されていないのです。住民は住み慣れた土地を離れ移転先に留まるか、仮設住宅で我慢の生活を送ることを強いられています。無くなってしまうような集落も少なくありません。

もう、マイナスイメージを与える「被災地」という言葉をやめて「復興エリア」と呼ぼうというムーブがありますが、私は依然として「被災地」だと思っています。

「復興災害」の犠牲者は、過疎の町に住む住民や、高齢者・子どもたちという社会的弱者です。阪神・淡路大震災の後、3年後くらいから学校が荒れてきたといえます。震災直後の緊急事態的に我慢していた生活も限界に達してへるのでしょう。

一方、宮城県教職員組合が、震災の半年後に公立小中学校の教職員を対象に実施したアンケートの結果、被災した教職員の3割が中度・軽度のうつ傾向であることが明らかとなりました。先生も生徒も大きなストレスを感じながら、生活しているといつていいでしょう。

しかしながら「創造的復興」は、生産性が必ずしも高くない地域や、住民が望む福祉や教育を見捨てて、巨防防潮堤や町を一変させるような開発に巨額の資金を投入しています。「復興災害」から目をそらすことなく、過疎の町の住民や、高齢者・子どもたちに寄り添う姿勢を持ち続けなければならぬと考えます。教育に携わる私たちにこそ、なをひびきます。

東日本大震災から4年を経過したこの被災地・宮城で、子どもたちのための教育について討論し、実践に向けた考え方と方法を検討することは、計り知れない意義があると考えます。被災地ならではのレポートやフォーラムも準備されています。ぜひ宮城にお出でいただき、実りある集会を作り上げていただきたいと思います。

少しは応えられたかなあ、と胸をなでおろしたの
でした。

2、自然

春

四年 友也

朝、学校に行ったら、さくらの花がまん
かいでした。そのあとに、うぐいすが、「ホー
ホケキヨ。」と、なっていました。

ほくは、

(もうすっかり春だなあ。)

と思っていました。少し歩いていると、タ
ンポポのとなりにつくしんぼがありました。

(やっぱり春だ。)

と思いました。

もうちよつとだ

四年 かづみ

「うわあ。」

うめの花がもうちよつとでさくぞ。

ポコポコと、そこらじゅうにつぼみが出て
いた。

ふしぎだなあ。

だって、あたたかい日なんてほとんどない。

雪ばっかりふって。
まだ春じゃないはずだ。
なぜだろう。

でも、もうちよつとだ。

はやく花が見たいなあ。

がんばってくれ。

春、急な坂道を登って校庭に着くと、満開の桜
が子どもたちの目に飛び込んでくるのです。友也
君はこの日、目の前に広がる満開の桜を見て、学
校の裏山で鳴いているうぐいすの声を耳にして、
そして校庭の端っこに咲いているたんぼぼやつく
しを見つけて、(もうすっかり春だなあ。)と感じ
ています。すぐくゆつたりとした気持ちで登校し
てきているんだなあ、と羨ましくなります。(朝
自習のプリントを印刷しなくちゃ。郵便局の払い
戻し用紙に職印をもらって……そうだ、育成会の
文書の封筒詰めも朝のうちにやっておこう。)な
どと考えながら駐車場から校舎に向かう私とは大
違いです。

一月末、昭君という男の子が校庭の裏で、雪を
どつさりかぶつた小さな梅の木に赤い花が一つだ
け咲いているのを見つけたと教えてくれました。
そのことを教室で話した次の日に、かづみさんは
この詩を書いてきました。この梅の木は、自分の
うちの庭の木です。学校の梅が咲いているのなら、
うちの庭だって……と見てみたのでしょ
う。(雪ばっかり降ってるのに、もう咲きそうだ。

ふしぎだなあ。)と考えるとあんなにかわつてい
とだ。がんばってくれ。)と応援してるところも、
(早く花が見たい。)と花を待ち遠しく思っている
ところも、どれもこれも素直でいいなあと思うの
です。かづみさんはこの数日後、(やつたあ、梅
の花が咲いたぞ!)という気持ちを詩に書いてき
ました。

「今の子どもたちは自然とあんまりかわつてい
ない。家の中でゲームばかりしている。」なんて、
こんな田舎の藤尾でさえもよく聞きます。確かに、
休みの日に学区内を歩いても、外で遊ぶ子どもの
姿はほとんど見られません。でも、ほんとにそう
かなあ、と思うこともあります。子どもたちは、
ザリガニやかぶと虫がどこで採れるかよく知って
います。学校の敷地内でワラビの生える場所を
知っているし(先生方は誰も知りません)、ニホ
ンタンポポの生えている場所も知っています。

この季節は、男の子も女の子もカナヘビ(子ども
たちはカナチーとよんでいます。)をペットに
しています。コンクリートの裂け目から花を咲か
せているタンポポを見て驚いたり、花瓶にさして
おいたつぼみの桜が花を咲かせたのを見て大喜び
したりもしました。どんなに寒くても、雪が積も
れば裏山でそりすべりをします。学校帰りに見た
雲の形だけで日記を書いてきます。道草も得意で
す。数えあげたらきりがありません。

大人は頭で「自然を守ろう。」とか「自然の中で
過ごす時間をつくらう。」などと考えて、(義務と

か必要性とか……)で自然とかかわっていることが多いのではないのでしょうか。その点、子どもたちは、もっと純粋にそれこそ自然体で、生活の一部に自然を取り入れているような気がします。

3、意外な一面

おつかい

四年 愛

今日、わたしが学校から帰ってくる、わたしのばあちゃんが、

「ちよっとおつかいに行ってくれない。」

と言ったので、わたしは弟といっしょに行くことにしました。

家を出てしばらく行くと、昭君と真土君と仁君が学校からかえってくる途中で、そのとき、弟が止まってしまいました。わたしが、

「はやく、一貫行ってよ。」

と言ったら、昭君たちが弟のじてん車をひいてくれました。弟がにこにこしている、

昭君たちが、

「もっとおしてあげる。」

と言いながら、おしてくれました。

「ここで曲がるから。じゃあね。」

と言って、と中で曲がってしまいました。

あとから、弟に、

「よかったね。」

と言ったら、うれしそうに、

「うん。」

と言っていました。

愛さんがこの日記を書いたのは、四月十六日です。この子どもたちと出会って一週間しかたっていないせん。この日記に登場する昭君の、その時点での印象は「落ち着きがなく、いつもおしゃべりしてる子」「すぐ友たちともめごとを起こす子」というものでした。だから、愛さんのこの日記を読んだ時、(へえ、昭君もやるじゃないか。)と、昭君の意外な一面を見た思いがしたのでした。でも、昭君の優しい行動を「意外な一面」ととらえる見方は、昭君にすぐ失礼なとらえ方だなどと思いません。「昭君は落ち着きがなく、すぐ友たちともめごとを起こす子」という昭君像を前提にしているから、優しい行動は「意外」としか私の目には映らなかつたのでしよう。

通信表を渡す時、

「これは、みんなのたくさんある力のうちの、学校の勉強のことだけを表しているんだから、通信表だけで自分や友たちのことを判断してはいけななんだよ。」

と話しているくせに、昭君のことを表面的に、そして一面的にしかとらえていなかったのは私自身の方でした。愛さんは、昭君の優しさを素直に受

け止め、素直に書いています。愛さんは、何の偏見も持たず、昭君を素直に見ています。子どもに教えられることは多いものです。

学校の規律という枠組みの中では、その子の全体をつかむことは難しいのかもしれない。しかし、その枠組みをはずすと、もつともつとよく子どもが見えるような気がします。「落ち着きがない↓興味あるものにそのまま向かっていく行動力」「おしゃべり↓友たちとかかわっていたいという気持ちの表れ」「すぐめごとを起こす↓友だちと本気でかわっている証拠」と見えてきます。

「カメラード」No.12に、故門真隆先生の「アキラとケン―巨視的にみる―」という記録があります。その中に、次のような引用があります。

「微視的に見るとき、ものは必ずしも美しいものではない。しかし、巨視的にみる心の大きさを失わず、微視的にみるものに及ぼせ。(森敦「天へ送る手紙」)」

そして、門真先生は、《巨視的に見ようとする心、それが教師の子どもへの「愛」ではないか。》

と、結んでいます。ああ、なるほどなあと心にストンと落ちる言葉です。

その後、昭君と一年間過ごしてみて、昭君のことがよくわかりました。彼のこの時の優しい行動が「意外な一面」ではなく「本質」であったことは言うまでもありません。

昭君の日記もいづれ紹介します

4、葛藤

おめでとう

四年 沙也香

今日は、あいのたん生日でした。じいちゃんが帰ってきて、じいちゃんがご飯を食べて、そのうちにわたしたちはおふろに入っていました。

わたしたちがおふろからあがると、みんなの間にあつまってわたしたちをまわっていました。そのうち、お母さんがケーキを持ってきました。見ると、はこが大きかったです。わたしは、そこにあつたほうちゅうでひもを切ろうとしたとき、思いっきりやったら、ゆうやのほつべたにあたりました。わたしはおこられました。そして、わたしは泣いてしまいました。わたしとおばあちゃんが作ったマフラーと、わたしもついていた写真立てを、あいにあげようと思ったのに、泣いてたのでわたせませんでした。わたしは心の中で、(わざとじゃないもん。でも、わたしが泣いてたら、あいのたん生日がぶちこわ……)と思っていたら、お父さんがわたしをだいて、こたつに連れて行きました。テーブルの上にはケーキが切つ

てさらにおいてありました。わたしはこたつにもぐりました。そのうち、お父さんが二階に上がって行ってしまいました。わたしはむくつとおきてケーキを食べて、そこにいるあいにプレゼントをあげました。あいは、

「あーとう。」

と言いました。お母さんは、

「いいなあ。」

と言っていました。

あひ、二才のたん生日、おめでとう。

この沙也香さんの日記は、文集にして学級で読み合いました。コメントをこう書きました。

(わざとじゃないのに、おこられたのはなつくくないかない。)という気持ちと(だからといって、わたしがずつと泣いていたんじゃない、あいのたん生日がぶちこわしになつてしまう。)という気持ち、沙也香さんの心の中でぶつかり合っていたんだね。二つの気持ちがぶつかり合うことを「葛藤」と言うんです。こういうことで葛藤するということとは、それだけ心が育っているということなんだよね。泣きながらも、(これじゃ、あいのたん生日がぶちこわしになつてしまう。)と自分以外の人のことも考えられるんだもの、心が育っているしよこだね。

お父さんに、こたつまでつれてきてもらったけど、沙也香さんはこたつにもぐってしまつた。心

の葛藤に決着がつかずにいたからなんだね。でも、沙也香さんは、最後にはプレゼントをわたし、あいのちゃんのたん生日を心からおいわいしてあげたんだね。いつまでもすねている心に、あいのちゃんをおいわいする心が勝つたのは、沙也香さんのやさしさが育つてきていることだし、何を大事にしなくちゃいけないのかを考える頭が育つてきていることなんだろうなあ。

こういう心の葛藤を何回も何回も経験しながら、少しずつ少しずつ成長していくんだと思うよ。でも、忘れてしまふんだよね。沙也香さんは、このことを日記にしたよ。日記に書くということは、その時のできごととその時の自分の気持ちを思い出して、ふり返えることだよ。日記のノートに文字で残るだけではなく、心にぎざみこまれるんだよね。

沙也香さんは、妹のあいのちゃんのことをたくさん日記に書いてきました。遊んであげたり、お風呂に入れたり、一緒におつかいに行ったり、熱を出したのを心配してあげたり……さまざまなかわりを書いてきました。沙也香さんとあいのちゃんの日常が目に見えてくるようでした。

この日記は、沙也香さんにとって多少つらいできごとを題材にしています。うれしいことや楽しいことだけではなく、つらかったことやいやだったことも書けるようになってほしいのです。つらいことを書くことによって、その時の心の揺れ動く自分としっかりと向き合うことができるのだ

と思います。人間としての成長は、自分と向き合うことから始まるのではないのでしょうか。

5、優しさ

お母さんのしらが

四年 薫

お母さんの頭には、しらががいつぱいあるようになった。このあいだ、おにいちゃんが、お母さんのしらがをぬいてあげた。

その時は六本ぐらいあった。

(お母さんもだんだん年をとって、おばあちゃんになるのかな。)

と思った。でも、まだまだおばあちゃんになってほしくないな。

だから、ぼくは、できるかぎりのおてつだいをしてあげて、しんぱいをかけないであげたい。いま、ぼくにできることは、せいやのめんどうをみることに、おふろそうじと、ねこのめんどうをみることに。

お母さんにしんぱいをかけないようにしよう。

しらががふえたら、おにいちゃんといっしょに、しらがをぬいてあげよう。

「あの子はいつも乱暴だけど、本当は優しい気持ち

ちをもっているんだよねえ。」

なんていう会話がよく聞かれます。ここに出てくる薫君はそういう子ではなく、ふだんの行動や会話にも優しさがいつも表れている子なのです。

道徳の時間に、友だちどうしでいいところを見

つけ合おうという授業をしました。薫君について、学級の仲間が出したことは、《いつもここにしている》《とつても優しい》《よくお手伝いをする》《誰よりも働く》《よく気がつく》《友だち思い》《家族に優しい》などなのです。薫君の人格がよくわかります。学級の仲間も薫君がどんな子なのかちゃんとわかっているのです。

私は今年度、薫君の弟の誠也君(二年生)を担任しているのですが、薫君はよく二年生の教室にやってくる。

「先生、誠也はかけ算、ちゃんとできてる？」

なんて話していくのです。よくけんかもするけど、やっぱり弟のことが気になるのでしょう。掃除が遅れている時に、

「手伝ってやつから。」

といつて、机運びをやってくれたこともありました。

この日記が書かれたとき、薫君の家では家族の入院や何やらで、お母さんはものすごくたいへんだったようです。

そのたいへんさは薫君はよくわかっていて、

「お母さん、うんとたいへんなんだよ。」

ということをよく話してくれました。働く姿に、

そして、しらがにお母さんの苦勞を感じとれる薫君なのです。

「しらががいつぱいあるようになった」と、しらががふえてきたことがわかるくらいお母さんのことを見てるのもいいなあ、と思います。またまたおばあちゃんになってほしくないな、という誰もが母親に対して抱いている気持ちを素直に書けるところもいいのです。そして、最も薫君らしさを感じたのは、

お母さんに心配をかけないようにしようと思つているところと、お母さんを少しでも楽にさせるために自分ができることは何か、と考えているところ。そして、弟のめんどうとねこのめんどうをみることに、おふる掃除をすることを決意するのです。薫君のお手伝いのおかげで、お母さんもすこしは楽になったかもしれませぬ。

この日記にあらわれている薫君の気持ちそのものが、お母さんに大きな元氣をあげたことは容易に想像がつかます。たかが一ページの日記だけど、そこに込められている思いは、何よりも美しいものです。

薫君たちのために一生懸命はたらくお母さん、そのお母さんの苦勞をしつかりと受け止めている薫君。こんなふうにして、また家族の絆は強くなつていくのだと思つのです。

(角田・藤尾小)

*「教育文化」——1998年——374号・375号・

376号・377号・382号より転載)

体育同志会との出会いから

鎌田 克信

私は、学生の頃、宮城教育大学の第27合同研究室（通称・久保研）に所属していた。そこには、夜になると現場の先生たちが集まり、何も分からない私たちに様々な話をしてくれた。世間話もしてくれたが、自分の働いている学校のこと、自分のクラスのこと、自分の行っている授業のことなどを、夢中になつて話してくれたのが、とても印象に残っている。

そして、一通りメンバーが集まると、何やら難しい話を真剣にしていたのも、鮮明に頭の中に残っている。

今思えば、それは、学校体育研究同志会宮城支部の集まりだったのだが、入学したての私には、よく分からなかった。仕事で疲れきって大学に来ているはずなのだが、ものすごい勢いとパワーがあったのが、不思議だった。

そういう姿を見て、自分も、この先輩たちのように、目の前の子どものことを熱く語れる教師になりたいという思いを持つた。

その後、教科研みやぎの会やみやぎ保健体育研究会などのサークルに、少しずつ顔を出させてもらうようになった。そこ

に集っていた先生方は、学生の私たちに、とてもやさしく接してくれた。学生の私は、報告される一つ一つの実践に対して、「すごい」と思うだけで精一杯であった。教材研究の深さと、教材にのめりこんでいく姿、子どもを思う気持ち、子どもの変容、それとともに深みを増していく子どもの作文。憧れと同時に、（自分に、こんなすごいことができるのだろうか）という気持ちになったことも、覚えている。

そして、とても印象に残っているのは、十数年前の東北民教研岩木山集会であった。中森孜郎先生の案内で青森県の今別町で「荒馬」を習ってきたその足で、数名の仲間と共に参加させてもらった。

分科会で、「身体と教育」という名称に込めた意味を熱く語る中森先生の姿、東北の各県から集まって来ているのに、昔からの友人のように実践について話し合う先生方。

とにかく、一人一人の子どもの姿が見える実践報告と、熱気にあふれた討論が行われたのが印象に残っている。そして、夜の野外での大交流会で、「春駒」やねぶたのお難子に合わせて踊り狂い、翌日、筋肉痛で足が上がらなくなってしまったのもよく覚えている。

その後、中森先生と一緒に寝台列車で京都まで行き、別の民間教育団体の全国集会にも参加したが、東北民教研のような、子どもの姿が出てくる報告がほとんどなく、少しがっかりした。

東北民教研では、目の前の子どもの姿から出発し、そこに働きかけ、教師も子どもも変容していくという姿勢に感動させられた。だから、それ以後は、毎回東北民教研に参加するようになった。

第1回「東北民教研」仙台集会の記

宮崎典男

前略 厳しいわたしたちの国の流れの中であつて、日々、教育と子供たちの幸福をまもるお仕事に大きな情熱をかたむけられているあなたに最大の敬意と同志としての愛情をお送りいたします。

さて、教育科学研究第一回全国協議会（於熱海）において東北地方大会を仙台で開催することを引き受けて参りました宮城県側としましては、その責任の重大さを感じ、「教師の会」を中心として準備を進めて参りました。（中略）みなさまには一日も早く東北大会の御連絡を致さねばならないと念願していたのであります。本県の事情はなかなか熟さず、今日に至りましたが、別紙の通り「教育科学研究東北地方大会第一次計画案」並びに「会準備相談会の御案内」を差上げることが出来るまでに至りましたことをお喜びいただきたいと思ひます。

計画案は「教師の会」「宮城県連絡協議会」で検討したのですが、あくまでも第一次計画案でありますから種々御検討の上、六月二十二日の会において決定いたしましたものと考へております。

準備会は七県の代表者会議というような意味で開催したいと考へるものであります。各県種々の事情があるものと思われまじし、正式に県代表という名目でなくとも、連絡者という資格に於ても積極的に御参加いただければ幸と存するものであります。

生活綴方運動の一つをとりましても、わたしたちの地帯が民族教育の歴史上に占める位置がどんなものであつたかは明らかなるころであります。過去のいかなる時代にも比して大きな危機を生きつつある祖国の運命の中で、わたしたちの地帯があつた進歩的な意義と教育の良

1 友よ、よくぞ生きてきた

上が教科研東北集会（東北民教研の前身）の最初のよびかけであつた。

代表委員についていくらかの注記をする。平間、佐々木、鈴木は宮城県における戦前の生活綴方、北方教育、生活学校、教育科学研究運動などの推進者。鈴木はその運動において「東北の機関車」でとおつた。あの暗黒の時代は佐々木とともに獄窓にあつた。遠藤（宮崎）もこれらの運動にくわわつた。大村は『教育』の戦前からの読者、和光学園から県教育研究所にうつつた。川村は宮教組の教文部長であつた。

戦前の宮城県で、民主的な教育運動の最後の拠点となつたのは、佐々木、菅野門之助による「カマラード」であつたが、戦後いちはやく鈴木、遠藤によつて復活した。そこでそだつたのが小泉、佐藤であつた。カマラードは二百数十名のすぐれた教師を組織するまでになつたが、一九四九（昭和二四）年、遠藤、佐藤がパージされるにおよんで壊滅的な打撃をうけた。しかし、真実の教育はこの荒廢のなかからめばえた。小泉を代表とし、鈴木、遠藤、佐藤などを核として、「教師の会」が地道な活動をしていたのである。

熱海にいったのは鈴木であつた。鈴木はそこで戦前の生活綴方の同志（戦前の教育科学研究会の大衆的地盤も東北の生活綴方の教師たちにあつた）にあい、結果的に、第一回の東北集会を宮城

心を守りぬくことができるか。―その新たな出発の金字塔として東北地方大会をあらしめるためには、六月二十二日の準備会にあなたの積極的な参加をいたたく外にありません。わたしたちは大なる期待と喜びをもってあなたの御来仙をお待ちいたします。

昭和二十七年六月二日

教育科学研究宮城県連絡協議会常任代表委員

小泉定光／平間初男／鈴木道太／佐々木 正
大村栄／川村理一郎／佐藤九二一／遠藤典男

でもつことを積極的にひきうけることになった。もちろん、そのとき鈴木木の頭にあつたのは「カマラード」「教師の会」の組織であつた。

「どうしてもたりないところはおれがもつ」と鈴木木はいつた。県の児童福祉司だつた鈴木には活動の時間がなかつたが、いくらかの金があつた（すでに『子どもからの親への抗議』『生活する教室』の反響が大きく、全国的に活動範囲がひろがりつゝあつた）。一方、金はないが、比較的時間の余裕のあつたのが遠藤であつた（パージ後、学校生活協同組合勤務）。

「やろう」と遠藤はこたえた。鈴木、遠藤を軸とし、小泉、佐藤を両翼に、東北集会の活動は開始された。この光栄ある最初によびかけも事務局長（？）遠藤の案内であつた。経過は単純であるが、このよびかけも、戦前、戦後のわたしたちの地帯の民主的な教育運動を土台とし、そのねがいと苦悩とよるこびをこめてなされたことはたしかである。「友よ、よくぞ生きてきた！」（『カマラード』復刊附一）。鈴木道太のことばであつた。

2 うずまきはひとつに

七県（新潟をふくむ）の代表者会議が仙台でもたれたのは六月二日であつた。参加者をつぎにあげる。（青森）青山栄・沢田温子、（岩手）小田一夫・佐藤田二郎・須藤成一・菅原哲朗・ナガイシヨウゾウ・ゴトウシゲオ・ヒラツカコウゾウ・田野崎東九郎・加藤春雄、（秋田）熊沢文男、（山形）無着成恭・田中新治・中島吉次郎・今野竹蔵、（福島）森謙・小沢一郎・堀口知明、（宮城）小泉定光・佐伯孝雄・村田幸造・佐藤義一・山内好男・泉勝江・駒板典義・平間初男・鈴木道太・佐藤九二一・遠藤典男・川村理一郎・森田逸郎・平塚孝・新沼栄司・熊谷昭司・佐藤信・佐藤利助・佐藤万亀夫・伊藤千代記・大村栄（この中にはじつさいは出席しなかつた人もあつた。連絡名簿といつた方がよいかもしれない）

大部分が戦後の新人であつた。当日までつぎのような声もよせられた。

▼川合郷（新潟ローマ字教育研究会）県内で教科研に参加した団体にはただちに連絡しておきました。大きな危機に直面している祖国の中で伝

統をもつあなたがたの集りを中心にこの会がひらかれることは重大な意義を有するものだと思います。わたくしは今、国語国字問題と教育の結びつきを考え、実践しているのです。この後も連絡していただきます。

▼佐藤喜久寿（福島・安達教科研）ご連絡恐れ入ります。機関紙「教師の会」までいた、たき一同大喜びです。県の連絡会の小沢氏（事務局長）に極力出席方をすすめました。

▼菅野与四夫（同前）ここまで計画をすすめて下さつた努力に心からの敬意を表します。夏の大会には是非参加したいと思つています。正直のところその時まで「金」を準備しなければならぬので、今度参加見合わせるしかないしまつです。

▼清野利保（青森）◇無着先生あたりもいいことをしゃべるんじゃないですか（私見）◇「教師の会」すでにNo.10に及んでいることを知り、わたしたちのルーズをせめないではいられない。◇わたしたちが今問題にしているのは、公然と会を作ること、それぞれの地域における盛り上がり、日本の教育の進路を決定するように、なれば平和と自由な社会をつくることのできるだろう。

▼吉田六太郎（岩手）北方のあらしは単なる感傷だけでは抵抗できないようだ。手をつなごう。

▼大室茂（新潟）全県的な連絡がとれていません。教組の青年部が少しずつ動いていますので努力

してみます。

国分一太郎、遠藤豊彦(福島)からも激励があった。わたしたちはこれらのことに、東北の仲間の共通の意識や熱い期待をよみとつた。準備会がその計画と内容において基本的な一致をみたことはいうまでもない。各県教組、代表者、連絡者をして配布した案内を、左にかかげておこう。

第1回教科研東北集会予算案

a 収入	
宮教組よりの後援費	10,000円
東北5県教組の後援費	20,000円
会費(宮城県内のみ。参加者1人200円)	20,000円
計	50,000円
b 支出	
講師関係	23,000円
会場費	5,000円
プリント	2,000円
接待	2,000円
通信・宣伝	10,000円
準備	5,000円
計	50,000円

しかし、これからがまた大変であった。経費についても準備会に提案されているが、堂々たる講師陣をそろえて5万円であげようというのである。講師宿舎に鈴木道太宅をあて、その接待を三千元であげるといふソロバンがはじかれていた(これは、ほぼそのまま実行されたが、ある教組からはついに入金がなく、その分は鈴木木のポケットからでて、すべてケリがついた)。

会場も平間などの奔走でようやくきまつたのであった。後に、この学校の校長は、この件により左遷されたといううわさがでた。

第一回 教育科学研究 東北地方大会案内

- 一、主催
 - 教育科学研究全国協議会
 - 教科研東北地方大会準備会
 - 教科研宮城県連絡協議会
- 二、後援
 - 東北七県の教職員組合その他(交渉中)
- 三、期日
 - 八月十五、十六、十七日(三日間)
- 四、会場
 - 仙台市連坊小路小学校(夜は教員組合会館)
- 五、大会の目標
 - われわれは第一回教育科学研究全国連絡協議会に於て、わが民族教育の当面する課題は「平和教育の具体的展開」と「生産教育の確立」にあることを全員の意志によって確認した本大会はこの基本的視点に基づいて、いかに実践を進めてきたかという報告を中心として、全員の討議は勿論、われわれの実践を批判し、指導するに足る理論をもつ学者の積極的参加を得て、われわれの果すべき歴史的任務を明らかにするにある。
- 六、実践報告、討議の主題
 - 「平和と生産の教育をめざして」いかに実践してきたか
 - A 東北の特殊性に立つ地域の教育実践
 - B 東北の児童生徒の現実に立つ学習指導
 - C 東北の社会における学級・学校の運営と児童生徒組織
- 七、講演
 - 平和教育と教育科学運動 大田堯(東洋大学助教授)
 - 農村問題の展望と教育 福島要一(農業統計数理研究所長)
- 八、日程
 - 第一日
 - 受付(午後四時)
 - 各県の情勢報告とそれにもとづく協議会
 - 各県協議会
 - 各県協議会
 - 第二日
 - 実践報告・討議(主としてa)
 - 実践報告・討議(主としてb)
 - 講演・質疑 福島要一
 - 講演・質疑 高橋慎一
 - 座談会
 - 第三日
 - 実践報告・討議(主としてc)
 - 講演・質疑 大田堯
 - 協議会
 - 九、その他の催し
 - 東北における教科研運動をいかに発展させるか。
 - その他の催し
 - 展
 - 一〇、会費なし
 - 一一、申込締切 八月五日(当日受付も可能)
 - 一二、申込所 宮城県柴田郡槻木町上町三〇 教科研東北地方大会準備会 事務局遠藤典男宛
 - 一三、実践発表希望者は八月五日まで、氏名、勤務先、発表主題をそえて申しこまれたい
 - 一四、宿泊希望者には斡旋する(泊四百円以下)
 - 一五、受付場所 仙台市北七番丁教員組合会館
 - 一六、夜間参加の無理な方は昼間だけの参加でも歓迎いたします。(昼間は午前九時より)

宿舎がまた大変。米持参で宿泊の時代。やすく泊まるには尋常のところであるはずがない。東北大学の学生会館・尚心寮を主に、長町館(米つき 四百円)をつかい、梅檀高校(現東北福祉大)寄 宿舎、北文社、千葉氏宅にまで分宿した。何回かの事務局の準備会は、ほとんど夕方から

深夜におよんだ。あつまる仲間もすくなく、事務局の実質的な手足になったのは東北大の学生だった。時間の経過と競争で準備をすすめた。

一九五二（昭和二七）年八月一五日のその日はきた。夏の日はまだ高いのだが、わたしたちの胸には心配と期待が交互に波うっていた。ほんとうにどれだけの同志があつまってくるといったろう。すでに、青森は午前八時に到着していた（慢性化している輸送力の低下と朝鮮戦争の影響から列車の運行は混乱）が、受付開始は午後四時。夕方になって、堀口教授に引率された福島など、各県の代表が到着するたびに拍手がわき、受付は忙しく、はなやいだ空気に満たされた。こうして、当日の受付は二二〇名になった（第二日は、ほぼ予定数の一八〇名）。

日本の子どもの幸せをねがい、教育の現在を憂うる東北の教師達が、このようにして語り合うことは何年ぶりでしょうか。第一次教科研運動が不幸な戦争によって断絶された後、私達はあなた方の実践の消息をきかなかつた。いまこそ語りあいましょう。十何年かの空白をのりこえ、更に今日の新しい困難に立ち向うために。（略）あくまでも会員の実践をきき、実践でこたえる教科研の組織の会です。

（東北のなかまを迎える「大会ニュース」）

異例の夕方開会。古びた講堂にしきつめたうすべりを、明るくともいえない電灯がてらしていたが、各県協議会が熱気をふきはじめる。同志は何をたずさえてきたのか。

・「単位研究会は三、四。しかし十月には県連絡協が発足する」（新潟）

・「教研集会、大学とも関連して単位研究会二十七。研究テーマの確立、会員の増加、実践の裏付けを課題に前進」（福島）

・「綴方や現場の問題を中心にした会が各地にあるが未組織。しかし組合と共に努力がつけられている。第二回大会は岩手で。それまで岩手は団結できる」（岩手）

・「教科研発足以前から児童文化研究会が活動をつづけている。教組・教育研究所と提携。目標は社会科学にねざした教育の実践」（山形）

・「歴史教育研究会、教育友の会などサークル研究、がなされている。線香花火ではなく、地味に活動を展開したい」（秋田）

・「『教育』の読者を中心に、戦争から子どもを守り、民族意識を反映する実践と実践家を守る組織をつくろう。青森もがんばっている」（青森）

午後九時をすぎていた。宿舎へのバスもおくれた。しかし、同志のもたらしたものは、そのことばだけではなかつた。

尚心寮の第一夜

岩手宿泊班は本部の御案内の好意で教養学部へ。真暗い中でバスより徒歩で急がせられた。校门より入って土足で寝室へ。静かさを破つてのガタゴト。階段を登る。長い廊下に響く。「兵營を思い出すな」「そういえば八月も十五日は……」歩きながら話はいつの間にか、軍隊の話へと……便所の方から石灰の臭が鼻をつく。

（X・Y生『大会ニュース3』）

※ 一泊五十円。食事は米二合持参で一食六十円（米なきときは八十円）。毛布持参でした。

大会の第一印象

本大会の運営に当って誠に民主的に用意周到親切を極められた事について心よい第一印象を受けた。大会案内所を駅構内に設備され、バス乗場まで案内されるなど。道には案内票を掲げて参加者に深い信頼感と安定感をもたらしたのは感銘深いものがあった。

（福島・長浜久雄『大会ニュース2』）

古い顔・新しい顔

「やあ」「やあ」とかわすコトバの中に、胸から胸にしみとおるものがある。同じ北方にすむ私たちにはわかるのだ。昔なつかしい古い顔と、たくましく子供ととつくんでいる新しい顔が一しよに集まることはとても愉快だ。奥羽の山なみの東と西に、南と

北に、北方性の歌声は大きなうずまきになった。「ひとりの力がみんなの力」になるために。うそでないほんとうのことを語るために。一すじの道を守ろう。

(山形・田中新治『大会ニュース3』)

子ども三人つれて

講堂でお話をきいていると、仙台にいることはすっかり忘れていました。しかし夕方になったときは三人の子供がきつと待ちくたびれているだろうなと気にかかってなりません。会が終わると会いたい人たちとの挨拶も交さず行ってみると、「こんで終わったのかはあ」としよんぼり待っていました。こんなにしてまで参加したいとの念願は多分私だけでなく、みなさんでもでした。だからこそ、理くつぬぎの親しさと力強さが感じられるのです。

(山形・山田とき『大会ニュース3』)

3 平和教育を軸に

実践報告や討議の柱は三つあった。それは、児童生徒の学習、学校の運営や児童生徒の組織、地域の教育実践であるが、この区別はあまり重要ではなかった。第一に、それらにはいずれも「東北の現実」とか「東北の特殊性」ということが冠せられていたからである。さらに、第二には、だれの目にも明白になってきたわたしたちの国の歴史

思い出すのは東北のなかまたちのこと

もう三三年まえのことか、といまさらのように近くて遠くなった教師であったころのことを思いだしている。私と日本作文の会、東北教科研のつながりは、第一回の仙台大会から始まる。教師になりたてで青くさかった私に教育の心棒のようなものを自覚させてくれたのがござの上の三日間であった。ことし三月に退職した無着先生もイガ栗頭でゴザの上に座っていた。彼はそのころから名士であったが、安達の教科研の一人の仲間たちと参加した夏の暑い日。そこで二年後に出会うはずの宮崎典男さんが、遠藤典男の名で裏方でいたことも後で知った。安達から信夫そして福島 of 教科研、作文の会、版画の会 etc. 約二〇年の間、あの仙台大会のござの上のいた時と同じきもちで、たくさんの仲間と子どものこと日本の教育の未来のことを熱く語っていた。そして現場をはなれて約一八年、教育の最前線ではなく、ひっそりと裏方を務めながら年老いたが、でも気持ちだけは変わらずにいる。

(阿部康 日本標準 1983年記)

史的課題―平和と生産―を自覚しないではいられなかったからである。

わけても「平和」の問題を。それは、わたしたち

ちのもとめた講演の主題にも明瞭にあらわれているし、実践報告をも基調づけている。たとえば、平塚孝(宮城)の報告は「反省会に取上げられる問題と子供の成長」であったが、その報告はつぎのようにむすばれた。

子どもが自分で考え、それを自分の力で実行すること、その中から正しいものへの批判力が養われる。私達は子供の日頃の行動や、作文や学習の中から問題を見つけ出すことが必要なのだ。そしてその中から子供の幸福を見出してやることであ

り、それが教育だ。平和教育だ。平和教育は「平和」を口にするのではない。平和教育は足もとにころがつている。

(*以下、会議録については省略。「東北民教研」はこのようにして宮城を第一回としてスタートした。)

(注:1983年8月、東北民教研30年史編集委員会が「東北民教研の30年『北方教育その継承と発展』と題する30年記念誌を発行。その中に、「第一章運動の基礎を問う」と題して、宮崎典男さんが第1回から第6回までについて書いた。そのなかの第一回についての転載である。ただし、後半部は省略してある。)